
祓い屋本舗

鮑 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

祓い屋本舗

【Nコード】

N5398Y

【作者名】

鉤 仁

【あらすじ】

自らの霊媒体質で人生が上手く行っていないと考える藤堂大介は、ある日、趣味のネットゲームのログイン画面で胡散臭い広告を見つける。そこには祓い屋本舗という胡散臭い企業の求人が載っていた。半ばやけくそでその企業に面接に行く事にした大介は、その際、あっさり採用される、晴れて有限会社祓い屋本舗の社員となった彼を待ち受けるものはなんだろう。

プロローグ（前書き）

世界観や設定がこの作品と被っている等の指摘がありましたらご一報ください。

プロローグ

俺という個人を表す記号、藤堂大介という男の特異な体質について他人に話す。そんな機械は未来永劫訪れないだろうと思っていたし、ましてやその特異な体質が多数数の会話で共通の話題になる可能性など考えもしなかった。

仕事を首になった俺が、失意のどん底で見つけたあの胡散臭い求人がなければ。

「藤堂君、君、明日から来なくていいから」

本日の仕事を終えて家に帰ろうと席を立ちかけた時、部長に言われたその台詞を、高校を卒業してからの三年で何度聞いたことだろう。とにかく俺は仕事と名の付くものは一通り出来ない。そんな自覚があるのは言うまでも無い。

今年に入って首になった会社は二社。恐らく神様に嫌われているのであろうこの俺はいらん才能ばかりを持っていて、まっとうな社

会人として生きて行く素質はからつきしだ。

そのいらん才能というのも幽霊や幽霊のようなものが見える程度のどうしようもないもので、日常生活で役に立つとは思えない。おまけに奴等、こっちが自分の事が見えていることを知ると寄ってくる、群がってくる、憑いてくる。メリットは皆無だ。

会社を首になった原因だって元はと言えばこの俺の体質が招いたことで、人一倍靈感の鋭い俺には多くの幽霊やその他の存在が寄ってくる。奴等は一度獲物を決めたら喰らい付いて話さない。こっちの事情なんざお構い無しで毎日毎日絡み付いてくる。

それを祓い退ける力もない俺は奴等のなすがままで仕事の効率は著しい低下を見せ、おまけに職場で起こる数々の超常現象。俺が居ないときは何も起こらないわけだから自然と超常現象と俺の存在は結び付けられるわけで、そんな噂が社内にまことしやかに囁かれ出した頃には俺はそろそろ首になると覚悟を決めなくてはならない。

俺は靈感が人より少し鋭い。それだけだ。なんで、こんな目に遭うのだろう。しかもこの体質、本当の意味で役立たずだ。

一度自分の特性をどうにか生かせないかと、シックスセンスを駆使したパチンコの台選びを敢行したが、そのとき得た物といえば俺に賭け事は向かないという残念な結論だった。

社会とは持たざるものには徹底的に冷たく出来ている。

地べたを這いずる事すら困難な自分の現状を嘆く暇も無く、俺は次の仕事を探す羽目になる。

しかしながら、そろそろ限界、そろそろいいんじゃないか、もう十分頑張ったと思うに至った俺は、自分の住まうアパートに帰るや否や、見苦しい逃避を見せる。

普段からの趣味だったネットゲームに没頭し、外に出ることすら拒み続け、気が付くと一ヶ月が経っていた。たった一ヶ月仕事をしなかっただけで、少なかった貯金はそこを突き、生まれて初めての家賃の滞納。渋々滞納を受け入れた大屋さんの汚物を見るかの様な目を目の当たりにした瞬間、何もかもが嫌になりもう死んでしまお

うかなどと考えながらここ数日ですっかりと習慣になってしまったネットゲームにログインしようとした時のことだった。

「何だこれ？」

気が付くとそんな呟きが自分の口から漏れていた。

ネットゲームのログイン画面の右上、そのあたりに胡散臭い広告があつたのだ。

「自分は幽霊が見える。霊媒体質だ。幽霊にまわり憑かれて困っている。そんな貴方に朗報。祓い屋本舗でその体質を有効活用しませんか……。頑張り次第で年収二千万も可能？何だこりゃ」

普段なら気にも留めない胡散臭いだけのはずのその広告から、俺は注意をそらすことは出来なかった。

この手の広告は見かけてもスルーが鉄則。だが此処でスルーして俺はこれからどうする。一生自分の体質を恨みながら人生を終えるのか？生きながらにして周りの人間の成功を妬む悪霊みたいな人間になるのか？もういい疲れた。そろそろ、自分の人生に幕を下ろしてもいい頃だろ。本当に最後だ。九割九分なんかの詐欺だが、最後に騙されてやろうじゃないか。これで騙されて何もかも失って、その上で死んでやろうじゃないか。

それまで、ネットゲームのログインと書かれたアイコンに合ったポインタをその胡散臭いサイトにあわせ手早くダブルクリックする。思っていたよりも早く画面が切り替わった。切り替わったページを見た瞬間に俺の口から短い呻き声のようなものが漏れたのは、このページの製作者の神経を疑いたくなるようなショッキングピンクのがウインドウ一面に広がったからだ。

一面ピンクで何もかかれて居ないそのページを啞然と見ていると数秒送れて、黄色の文字が浮かび上がってくる。どうでもいいが読み難い。

面接地 東京都〇〇区〇〇町1-5〇〇ビル15階

面接日、時間 貴方の都合で結構です。受付に本サイトを見た
伝えれば即面接に移らせていただきます。

それでは面接でお会いするのを楽しみにしております。

それだけが書かれていた。一体なんだってんだ。まあ、もとより
何も期待なんてしてないわけだし。こんなもんかな。

しかしどんなに胡散臭かろうと、最後の面接だ。面接日も面接時
間も俺の都合でいいみたいだし。明日あたり行ってみるか。

面接そして

面接当日、といっても具体的に何かを指定されたわけでもなく完全に俺の都合で来たわけだが、面接会場となるビルの前まで到達した俺は正直、面食らっていた。因みに今の俺には、歩道橋で見つけた頭から血を流す女が腕に組み付いている。

モテモテだな、俺。全く嬉しくねえ。

しかし今はそれどころではない。あんな胡散臭い求人だから何も期待せずやってきたというのに。

「で、でけえ」

もっと古くてみすばらしいビルを想像していた。そういえば面接会場も14階とか書いてあったもんな。一体なんだってんだ。

思ったより立派なビルだったという事実で俺の意識は自分が着ているヨレヨレのビジネススーツへと向かった。

ヤバイ、着てくる服間違えた。今日のところは帰って……いやいかん。俺にはもう金が無い。クリーニング代は愚か此処に来る交通費すら危うい。

このまま行くしか無いのか。まあいいさ、元々なんかの詐欺だろうし。此処だって面接のためだけに借りた建物だってこともあるんだから。

などとよく分からない論理を展開させた俺は、腕に組み付き「助けて」と懇願とも呪詛ともつかない言葉を発する女の霊をズルズル引きずりながらビル内へと入っていった。

腕に組み付かれた女は重く、そのおかげで歩き方も不自然になる。周囲からの奇異の視線は俺に向けられたものだろう。もう慣れている。

女を引きずるようにエレベーターまで到達すると、荒い呼吸を整えながら女に言った。

「いいか、俺はこれから面接なんだ。とにかくぶら下がったり引つ

張ったり、変な真似するなよ」

「助けて」

「面接が終わったら出来ることはしてやるから。大人しくしててくれ」

血塗れの女は笑っているつもりなのだろうか、その顔を一度不気味に歪めると一度だけ小さく頷いた。

到着したエレベーターに乗り込み、14階にたどり着くと、俺はエレベーターを出て直ぐの受付に歩いて行く。相変わらず、血塗れの女は俺に組み付いているが、さっきの取引が功をそうして重みは感じない。受付のカウンターに鎮座する受付嬢は近づく俺に気がつくこと極上の笑顔を浮かべる。

「ご用件は、お祓いですか？」

そこで俺はある事に気がついた。この受付嬢、顔は笑っているが、目は俺を見ていない。

俺の腕、俺以外には絶対に見えないであろう血塗れ女を見据えている。気のせいだよな。

「いえ、そのネットで御社の求人を見つけまして。面接を受けさせて頂きたいのですが」

「少々お待ちください」

受付嬢はそう言うと、内線電話で誰かに連絡を取っている。

内線電話での問答はすぐに終わった。

「奥へどうぞ、事務所に入ってくださいの所にソファがあるのでそこに座ってお待ちください」

俺は受付嬢に一礼するといそいそと、言われた通り、受付を抜け事務所へ続く通路を抜けた。

「すげえな……」

通路を抜けた瞬間にそんな言葉を発したのは、事務所が昨今の不況を忘れさせるような豪華さを誇っているからだ。高そうな絵画、俺のような素人でも人目で高級品と分かるような家具の数々がそこにはあった。一体なんなんだこの会社は、有限会社ってこんなに儲

かるのか？

最早腕に組み付かれた女の存在すら忘れ、高そうなソファアに腰を下ろした俺は、どこか落ち着かない気分で十分ほどその場で待つことになった。

待つこと十数分やってきた初老の男を見た瞬間俺は昨日のホームページの製作者が誰であるかを知った。なぜならその男は、どこで買ったのかを聞きたくなるような悪趣味なスパンコールの入ったピンクのスーツを纏い、同色のハットを被り同色のシャツを着て同色のネクタイを締めている。

とにかく全身ピンクづくめだった。

「いやあ、お待たせ。まあ、今後の契約内容の話とかもあるからとりあえずこっちに来て」

俺の前に来るや否やその全身ピンクの男は言った。……ちよつと待て。

「あの……」

すでに俺に背を向け、歩き出そうとしていた男は呼び止められると不思議そうな顔でこっちを振り向いた。

「なにかな？」

「あの、これって面接ですよ」

「そうだよ」

「今後の契約とか言っていましたけど」

「そうだよ」

「おr、僕まだ採用すら頂いてないんですが」

「ああ、そんなこと気にしてたの？じゃあ採用。はい行こうか」

「ええ！？」

なんだこのザルみたいな面接。今更だけどすげえ不安。大丈夫なのかここ。

その言葉をいい残し、男は勝手にスタスタと奥へ行ってしまった。仕方なくその男の後についていった俺が次に通されたのは、ガラスのテーブルと本皮のソファア、が置かれた応接室と思しき場所だっ

「……冗談ですよね」

「私は冗談は好きだが、こういった場で冗談は言わないようにしている」

「じゃあ、打ち間違えとか」

「いや、これが君の年俸だ」

「0一つ多くないですか？」

「ん？ いやいや多くないよ」

新人の俺の年俸はどうやら一千万らしい……。

一千万！？

「やっぱり0一個多いような」

「それだと君の年収は100万なのだが、それでいいの？」

「いや、よくないです」

即答してやった。

「危険な仕事だからね。業界じゃこれくらいが相場だよ」

「はあ」

「まあ、君も今は貰いすぎだとか思うかもしれないけど、本格的に働き始めればすぐに思うよ。割に合わないって」

「いやいや、脅かさないで下さいよ」

一千万ももらえる仕事が割に合わないってなんだよ。

「時に君、さっきから気になってたんだけど、横に引っ付いてるその女性、君の彼女？」

あまりの急展開に存在を忘れていたが、俺また取り付かれてたんだっけ。てかこの人ただのピンクオヤジじゃなかったの？

「何をそんなに不思議そうな顔をしているのかな？ 私は祓い屋本舗の社長だよ。霊視くらい出来なくてどうするの」

そういえば、あの受付嬢もこの女の存在に気がついてた？ 本当に見えるの？ この人たち。それよりこの人社長だったの？ 嘘だろ。

「い、いや、違いますよ。取り付かれてるだけです。後で何とかしますんで」

「何とか？」

「この面接が終わったなら、この霊の頼みを聞くことになってるんです」

「ふうん。それ、私が祓おうか？50万で」

「いや、僕50万円も持ってないんで」

「君の年俸から天引きしとくよ」

「祓うって一体どうするんです？」

勝手に引っ付いてきた女だが、それを力づくで祓うとかなら断る。「なに、その手の霊は行く道が分からなくて苦しんでいるんだ。道を示せば勝手にあるべき所に還る。その手助けをするだけだよ。まあ、これからやる仕事の勉強だと思って見て行きなさい」

なぞのピンクオヤジは立ち上がり、こちらに歩いてくる。俺の隣の血塗れ女の前まで来ると、その女の額付近に手のひらを差し出す。そこで俺は身構えた。この男が妙な動きをしようものなら血塗れ女を引き摺りながらも全速力で逃げられる用意を整える。

しかし、手のひらを翳しただけでそれ以上のことは起こらない。目に見えるような変化は何も現れない。なんだやっぱり嘘じゃないかと俺が安堵とも落胆ともつかない感情を抱いた時、変化は突然起こった。目の前に現れた。光のトンネル。そう説明するほか無いものが俺の目の前に突如現れたのだ。その中から溢れるように滲み出してくる暖かな感覚。血塗れ女は俺から手を放すと吸い寄せられるようにその光へと歩いてゆく。

吸い寄せられるように動いたのは女だけではない。俺もだった。あの安らぎに満ちた光のなかへ行きたい。あの光には何も無いだろう。恐怖も苦痛も苦悩も、あそこはまさに俺の求めた……

フラフラと光に向かって近寄る俺の腕は少し皺のよった手にガツチリと？まれた。呆けやようにその手を見る俺に声が掛けられた。

「君はまだ生きてるんだから行ったらいいかん」

「あっ……」

女がその光に入るとすぐにそれは消滅した。僅か10秒ほどの出来事だった。

「という、流れだ。まあ、これはケースとしては一番簡単なものだ。大半はこんな簡単じゃない」

先ほどの事など無かったかのように話し出すピンク男は自分がしたことを誇るでもなく放し始めた。

「というわけで、さて契約内容の話の続きをしようか」

促されるままに、訳の分からぬままに俺はソファアに座らされ。今後の契約内容とやらの話をただ黙って聞いていた。

さっきまでと違うのは、このピンクのオヤジを胡散臭いと思う気持ちには綺麗さっぱりと消えうせていたという事だ。

研修開始そして（前書き）

まだ二話目ですが感想や、ここおかしくねえ？等のご指摘ございまして
たらよろしくお願いします。

研修開始そして

結局、あのピンクの男は本当に社長だったらしい。

氏名は戸田重蔵。年齢48歳独身。好きな食べ物は天丼らしい。聞いてもないのに自らの個人情報をつぶやするあたり。コミュニケーションに飢えているのだろうか。

社長の話はさておき、数日前に行われた面接、彼が除霊を終えたその後の話の概要はこんなものだ。

社員の年俸は、その年一回の評定で決まり、最低が1000万だという事。後は能力に応じて上昇するらしい。基本給の年俸とは別にその時々のお働きに与えられる報奨金もあるという。労災あり。退職金もある。何やら至れり尽くせりの契約内容だが、生命保険への加入を強く勧められた。

物騒な雰囲気をつンぷん漂わせ、その上謎も多い企業の社員になった俺は借りていたアパートを急遽引き払う事になった。

どうやら侵入社員の義務とやらで、三ヶ月の社員研修があるらしく、その期間は、研修所の宿泊施設に泊り込む事になるらしい。

入社と同時に振り込まれた年俸で滞納した家賃を支払い、俺は研修所のある〇〇県へと向かった。

観光地としても有名な高原。本当にこんな場所に研修所があるのだろうか、などと半信半疑でメモに書かれた場所に向かう。ハイキングコースから横道に逸れて少し歩くと、そこはもう観光地ではなく鬱蒼とした林の中だった。

メモは面接後に渡されたものだ。存在意義を見出すのが難しいくらいアバウトなそのメモには、俺には想像もつかない、というか臭いすぎて鼻を掴みたくなるくらい胡散臭いオカルティックな処置が施されているらしく。持っていればメモが研修所まで導いてくれると聞いている。何の事かはさっぱり分からない。

とにかく、こんなメモに頼るなど、本来の俺なら考えられない事

なのだが、昨日のあの光景、女性の霊を祓った社長の手腕を見てしまふと、彼の言ったことが、正しいように思えてしまうので困ったものだ。

ハイキングコースを外れて漠然と歩き続ける事数十分。メモの効果なのかは定かではないが、白いコンクリートの建物が見えてきた。そう言えば建物の外装についての情報は一切無いな。あれがそうなのか？いや、そうに違いない。というよりそうであってくれなければ俺が困る。舗装のされていない林の中を歩き続けるのは意外に疲れることを俺は21年間の生きてきて今日初めて知った。

もう疲れた。ママ、抱っこ。などと状況が許すならば言ってしまうくらいには疲弊しているので希望的観測が多分に含まれているが、あれが目的地だという結論に達した俺は、これまでの人生で一度たりとも見せた事無い迷いの無い動作で建物へと近付いて行く。初公開、藤堂大介のキビキビした動作である。なんでか知らんがとてつもなく情けない。

建物の門をくぐっても、人の子一人見当たらないのはこれいかに違ったかもしれない。そんな風に考えながらも足は奥へ奥へと進んで行き、入り口を入った所で横合いから半ば不意打ち気味に声を掛けられた。

「研修の方ですね。お名前をどうぞ」

その時の俺をビデオにでも撮ったらさぞかしおかしな動きだろう。要するに、物凄くビックリした。横から声を掛けてきたのは昨日の面接で受付に居たあの受付嬢だ。

今更ながら、受付嬢をしているだけあって容姿は整っている。そして俺は美人に対すると必要以上に緊張する典型的なダメな人だ
「と、藤堂大介でしゅ」

噛んだ。

彼女は一度俺から視線を外し、持っていた紙束（おそらく研修参加者のリストか何か）を確認した後、再びこちらに視線を向ける。
「藤堂さん。はい確かに。階段上がってすぐの部屋でお待ちください」

い。座席は指定されているので自分の席を確認の後、着席下さい」
俺が囁んだことなど無かったかのように振舞う彼女は、いったい何者だろうか、などと考えるのは自意識過剰だろうが、だが、美人の前でのこの失態は俺のMPを^{メンタルポイント}ごっそりと削り取っていったのは紛れも無い事実だ。

「はい、行ってきます」

よし今度は囁ますに言えた……って、行ってきますじゃねえよ！
何してるの俺？ 普通にはいいじゃん！ なんて変なオプシヨン付けてるの！？

ほら、お姉さんなんか笑ってるよ……え？ 笑ってんの？

「貴方、この間面接に來た人ですよ。素敵な女性と一緒に。結構緊張してます？……ぷふ」

まあ、引かれないだけマシかな。普通ドン引きすると思うんだけど。まあいいか。

「え、ええ、なんだかポンポン決まって、何も分からないままここに來たので多少は……」

多少じゃなくてかなりだけど。しかも緊張してるのは貴方が美人だから、アレルギーみたいなもんです。なんて言えるわけない。彼女の勘違いに感謝だ。

「まあ、これからの三ヶ月で基本的なことは大体叩き込んでくれると思うから、心配しないでいいわよ」

叩き込む、ですか。気の小さい俺にはその言葉が物凄く不穏なワードに聞こえてしまうのだが。勘違いであってくれ。

「へえ、なら、少し安心できました」

語尾を失敗した。もういいや。どうでも。

「そうそう、その意気。頑張ってね」

内心ビビリまくってる俺に、その意気って、どの意気ですか。

「が、頑張りまーす」

などとイレギュラーな会話を終えた俺は最初に指示されたとおり階段を上ったその先にある一番近い扉を開けて部屋に入った。

部屋の中は思ったより広く、全体的に白い。白い床、白い壁、白い机、ホワイトボードも当然白い。

予想はしていたが、研修に参加するのは俺だけではないようだ。すでに、席には十数人の先客が座っていて、皆それぞれの方法で時間を潰している。

俺も自分の席を確認すると、そそくさと着席し、後は研修の開始を待つばかりとなった。

しかし、研修開始仕官を過ぎても誰も現れない。10分が経20分がたっても誰一人入ってくる様子を見せない。

会場内は、だんだんと苛立つ者やそわそわする者が増え始める。かく言う俺もその一人な訳で、こんな事だったら、本の一冊位持ってくるべきだったと後悔し始めた頃になり、ようやく扉がガラガラと開いき、深緑の生地に黒いラインという数日前の面接官である社長を彷彿とさせる奇妙な色合いのスーツをきた血色不良の男が会場に転がり込んできた。この会社ってこういう服が流行ってるのか？「いや、いやいや、遅れてしまって申し訳ない。昼食を食べ過ぎてしまっただけ。その後、私には到底抗えない睡魔が僕に襲いかかってきてね、少しのつもりで昼寝をしていたら。こんな時簡になってしまった」

寝坊かよ、などと考えていた俺の思考を読み取るかのようにそれを実際に口に出した猛者がいた。

「講師が寝坊ですか？」

いいのか？これ。こういうときは腹でどう思っようとスルーするのが基本てきな処世術じゃないの？

どんな奴だと、声のした方をみるとやっぱりと云うか。期待を裏切らないふてぶてしい男がそこに居た。金髪、ピアス、アロハ。そしてあの言動である。見た所俺と同じか少し下か……どちらにせよ俺とは接点などおおよそ無いであろうその人物は不適な表情で上限一杯まで後ろに出した椅子に漫画に出てくる番長のように座っている。

というより忠実に真似てるっぽい。多分その手の漫画が好きなだろう。

「いやいや、本当に申し訳ない。じゃあ、時間もおしているの……」

珍妙なスーツの男はもう一度謝罪をし、話を進めようとしたが、同じ男が横槍を入れた。お前一体何しに来た。

「時間がねえのは誰のせいなのかねー」

まあ、一理あるが、ごねても仕方ないだろうが。それとも何か？ 時間返せとか言っちゃう気なの？

「時間返せよ」

言いやがった。

無茶振りきたー！ー！ー！

これから上司になるかもしれない人間にそれを言うとはある意味英雄だよあんた。口には出さずに、心の中だけで賛辞を送ろう。

「不可能です。ですからこれからのスケジュールを巻いて予定通りに終わらせようと考えています」

「そんなんで納得すると思ってるのか！？ ああ！？」

いや、俺は納得してるんだけど。

「では、どうすれば納得していただけますか？ 私を殴りますか？ いいですよ。それで貴方の気が済むのならね。私も最低限の自衛はしますが」

なに言ってるのこの人。この金髪絶対学生時代ブイブイ言わせてたクチだよ。ほら、なんか嬉しそうじゃんあの金髪。この金髪本当に何しに来たんだよ。

「あんた、自分の事、俺が殴れねえと思ってるだろ。俺はな、高校も教師殴って退学に」

「来るなら早く着なさい。時間の無駄です。強いのは口だけですか？」

緑スーツの男がそういった瞬間、俺は聞いた。金髪男のこめかみから何かが切れる音を。

勢いよく立ち上がり椅子が大きな音を立てて床へと倒れる。瞬間、会場内に緊張が走る。不安そうな表情。あからさまに迷惑そうな表情。反応は様々だが、こういった場に遭遇した時に見せるそれらしい反応。しかし会場内の大多数がそんな反応を見せている中で数人が平然としている事に俺は気が付いた。

俺が、その数名を不思議に思ってる間にも時間は当然経過している。

金髪男が、緑スーツの男目掛けて猛然とダッシュを始めたところで俺の注意は再度そっちに向けられた。

獲物に狙いを定めた獣のように駆け出す金髪男。しかし、そんな異常事態にも関わらず緑スーツの男は身構える事も無く普段と変わらぬような口調で言った。

「我々の、そしてこれから皆様足を踏み入れるのは、少々バイオレンスな世界です。ですから、血の気が多いのは大いに結構。でもね……」

緑スーツの男がそこまで話した時、ついに金髪男が自身の射程距離に到達した。拳を大きく振りかぶり。その拳を緑スーツの男目掛けに猛猛に奮う。

俺は、コンマ数秒後には、緑スーツの男の顔面が血を噴出しながら大きく後ろに仰け反る姿を連想した。周りの人間も同じだろう。会場内の空気が急速に張り詰める。

だか、そうはならなかった。

なにをどうしたのだろう。緑スーツの男は猛スピードで迫る金髪の拳を左手一本で絡め取ってそのまま投げ倒している。あの一瞬で何が行われたのかはよく分からない。倒れた金髪男は受身など当然取れる筈も無く、無防備に地面にたたき付けられ、俺にはただ手を握っているようにしか見えないが、金髪男はその後もしち上がれないらしい。

初めこそ緑スーツの男の拘束から逃れるために暴れていたが、彼が上から少し力を加えると苦悶の表情を浮かべながら悲痛に叫び始

めた。原理は分からないが倒れた男の関節を巧みに極めているらしい。

「あっ！ぐぎぎ……がああああ！！」

先ほどの威勢が嘘のように金髪男の苦悶に満ちた叫び声は次第に許しを請うような嗚咽へと変わっていった。

しかし緑スーツの男は表情を変えることなく男の関節をギリギリと締め上げて続け、短く言った。

「血の気が多いだけじゃ、死んじやうよ」

会場内は文字通り水を打ったように静まり返った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5398y/>

祓い屋本舗

2011年11月17日03時10分発行